

英語の音声指導に関する一考察  
— 大学の英語授業におけるリズム指導のために —  
A Study of Teaching English Pronunciation  
— For Teaching English Rhythm to Japanese College Students —

藤 上 隆 治  
Fujikami Ryuji

**Abstract**

The purpose of this paper is to outline English rhythm and to teach it to the native speakers of Japanese learning English as a foreign language. The paper describes three points as follows:

Firstly, it describes the necessity of teaching English rhythm to the learners through their recognition and understanding of the characteristics of the English pronunciation. It also mentions that it is important to compare English with Japanese in a timely manner in order to have them understand English rhythm more profoundly.

Secondly, it overviews some of the features of English rhythm in comparison with Japanese. For instance, English rhythm is composed of an alternative appearance of strong and weak stresses, whereas Japanese rhythm uses the structure of high and low pitches. In English, a stressed syllable is pronounced more strongly and longer than an unstressed (or weak) syllable. In Japanese, however, each syllable is pronounced almost equally regardless of high or low pitches.

Finally, the paper shows a teaching plan of English rhythm. It also mentions that 11 lessons are given to the author's students, and discusses the findings.

The author acknowledges that the said teaching plan may not be fully suitable for all teaching situations. However, he hopes that the paper will provide the readers of this paper with some clues to teaching of English rhythm in their teaching situations.

## はじめに

本稿は、日本語を母語とする大学生に対して英語の音声指導を試みるものである。Englishes の時代といわれる昨今、英語教育においては、できるだけ多くの国や地域で理解してもらえようような音声指導が必要である。その方が、理解度の高い発音でコミュニケーションが取れるからである。

理解度の高い発音の習得には、音素とかぶせ音素の両面から発音を学習しなくてはならないが、今回は、かぶせ音素、その中でも、英語のリズムに焦点を当てる。また、英語のリズムを生み出すストレス<sup>(注1)</sup>にも言及する。

英語のリズムに焦点を当てる理由であるが、先行研究でも例えば、小川 (1978:25) は、「発音で大事な基礎はリズムである。リズムは音の強弱である」と述べているように、リズムは発音の土台だからである。この土台の上に気持ちを表すイントネーションがかぶさってくる。従って、土台となるリズムができていないと、個々の発音が正しくても、聞き手に自分の話す英語が通じにくくなる（あるいは、通じない）のである。この考え方を立脚点として、調べた限りではあるが、本稿では英語のリズムの理論を述べると共に、指導実践例も提示する。そして、本研究の目的を以下の3点とする。

- (1) 英語のリズムの重要性を概観する
- (2) 英語のリズムの主な特徴を整理する
- (3) 英語のリズムの指導実践を提示し、その結果を考察する

## I. 英語のリズムの重要性

言語現象における音声は「聴く」「話す」「読む」「書く」にも影響していることは既に先人の言うところである<sup>(注2)</sup>。1980年代半ばのプラザ合意以降、生産拠点を海外に移転する企業が増え、グローバルな企業経営が加速してきた。そして、直接的に「聴く」「話す」機会が多くなり、コミュニケーションにおける音声の必要性は増している。

この音声の中でもコミュニケーションという点で重要なのは、発音やイントネーションもさることながら、リズムであると考えられる。これは先行研究でも述べられている。例えば、森住 (1978:22) は、「英米人の言うことが聞き取れなかったり、逆に Pardon? と聞き返されるときは英語のリズムが会得されていない場合が大部分であろう」と述べている。また、三浦 (1995:127) は、リズム指導が音声教育の基本であるとし、次のように指摘している。

コミュニケーションのためには、単音よりもリズムのほうが大切であり、単音の習得はとても難しいものである。リズムの習得が単音よりも易しいわけではないが、リズムの指導を優先しないと、努力の結果、単音が正確に発音でき、聞き取れるようになったとしても、コミュニケーションには役立たない。

大喜多 (1998:26) は、「英語を母語として話す人たちは、互いの意思を伝達するのに、母語や子音の個々の音声だけでなく、rhythm に依存することが知られている」と述べている。そして、田中 (1968:4) や島岡 (1973:21) など多くの先行研究は、個々の音の発音が多少違っていても、リズムに乗って話す方が通じる度合いが高いことを指摘している。他にも英語のリズムの特徴や必要性については、Dixon (1886<1980>:5), 神保 (1927:189), 今村 (1958:262), Pike (1965:34), 小松 (1986:22), 窪蘭・溝越 (1992:172), 五十嵐 (2003:415) など多くの先行研究が言及している。

## II. 英語のリズムの主な特徴

日本語にも英語にもリズムはある。しかし、英語のリズムを教えるためには、日本語のリズムを知っておく必要があると先行研究でも指摘されている (例えば、森住 1978:22, 藤井1979:14など)。本項では、日本語のリズムの特徴に簡単に言及しながら、英語のリズムの特徴を整理する。

### 1. 日本語のリズム

英語のリズムを述べる前に、日本語のリズムについて述べておきたい。ごく簡単に述べるならば、次の3点が挙げられる。まず、日本語では、長音、促音、撥音も含めて各音節<sup>(註3)</sup>が同じ長さで発音される。例えば、「私」は[わ][た][し]が同じ長さで発音される。「一体」の声門閉鎖音[っ]は発音しないが、[い][っ][た][い]というように他の音と同じ長さである。そして、坂野 (2004:17-67) は、日本語は2音を基本単位とし、2音が繰り返されて4音、4音が繰り返されて8音、つまり日本語のリズムは4拍子ということになると指摘している。坂野の例を借りれば、「きらきら」「ワンワン」「にこにこ」などの擬態語・擬音語は2音の繰り返すことでリズムができる。また、「それでいいのだ」は「それ|で・|いい|のだ」というようにポーズ (休止)<sup>(註4)</sup>も1音と数えられ、リズムが保たれる。

次に、日本語のリズムは音の高低 (ピッチ) による。例えば、標準語 (東京方言) では、「満月」は[ま<sup>ん</sup>げつ] (高低低低)、「隣」は[と<sup>なり</sup>] (低高高) である。そして、「箸」[は<sup>し</sup>]と「橋」[は<sup>し</sup>]、「二羽鳥がいる」[に<sup>は</sup>とりがいる]と「鶏がいる」[に<sup>は</sup>とりがいる]のように、第1拍

目が「高」ならば、第2拍目は必ず「低」である。その逆に第1拍目が「低」ならば、第2拍目は必ず「高」である。また、高いところは1ヶ所のみで、一度「高」から「低」に下がったら、二度と上がらない。「二羽鳥がいる」を[にほとりがいる]（高低低高低高低）とは言わないのである。他にも、例えば、「電気」[でんき]（高低低）と「冷蔵庫」[れいぞうこ]（低高高低低）が組み合わさると、後の要素のリズムに引っ張られて「電気冷蔵庫」[でんきれいぞうこ]（低高高高低低）というリズムになるといった特徴がある（例えば、窪菌・溝越1992:115など）。

最後に、日本語は音の高低リズムによって、意味を区別する。標準語では、／あめ／を[あめ]（高低）と発音すれば「雨」を意味し、[あめ]（低高）と発音すれば「飴」を意味する。また、「花」も「鼻」も[はな]（低高）であるが、「はながあかい」という場合、「はな」に続く助詞「が」の高さによって、「花」または「鼻」が赤いという意味になる。以上、標準語における特徴を示したが、方言によっては高低のリズムパターンが逆になる場合がある<sup>(注5)</sup>。しかし、そうであったとしても、高低によって意味を区別することには変わりはない。

## 2. 英語のリズム

英語のリズムは音の強弱（ストレス）である。そして、その種類は、第1ストレス（primary stress）、第2ストレス（secondary stress）、第3ストレス（tertiary stress）、弱ストレス（weak stress）などがある。例えば、expectation という言葉なら、-ta に第1ストレス、ex- に第2ストレス、-pec- に第3ストレス、そして-tion に弱ストレスをそれぞれ置く。しかし、Sweet（1877<復刻版1998>:91）、小林（1964:46）、宇都出（1983:13）などで述べられているように、外国語として英語を学習する上で、そして実際に使用する上で、そこまで厳密に区別する必要はないと筆者も考える。日本語の高低リズムに慣れている英語学習者にとって大事なものは、まずは強弱（ストレス）を教えることである。これができないと、英語のリズムが取れなくなるからである。そして、そのあとに、第2ストレスの存在を教える。第2ストレスはリズムを整えるために、第1ストレスの代わりを担える“potential primary stress”（潜在的な第1強勢）（Matsusaka 1980:77-78）だからである。従って、本稿では、ストレスの種類を第1ストレス（primary stress）、第2ストレス（secondary stress）、および弱ストレス（weak stress）の3つとし、いろいろな文献に倣って、それぞれ「●」（第1ストレス）、「●」（第2ストレス）、「・」（弱ストレス）という記号で示すことにする。

次に、英語では強弱がほぼ規則的に繰り返される。そして、内容語<sup>(注6)</sup>と機能語<sup>(注7)</sup>を目安にしながら、強く発音する部分をほぼ等時間隔で繰り返すようにリズムを取って発音する。この最初の「強」から次の「強」の前までの間をフット（foot）と言い（Dixon 1886<1980>:120、川越2001:184、Catford 2004:171-172、Halliday 2004:12、

Roach 2004:164など), その間にある弱ストレスの数に関係なく, 各フット間はほぼ同じ間隔で話される (大八木 1980:36-37, 竹内 2004:47-48など)。例えば, Mary sold a nice and yellow racket. という文では, 次のようなフット構成になる。

Mary	sold a	nice and	yellow	racket
● .	● .	● .	● .	● .
1	1	1	1	1

各フットの構成は「●・」で, 規則的に等間隔で繰り返されている。従って, 発音しやすいし, 聞きやすい。

最後に, 英語では音の強弱で意味と品詞を区別する。例えば, CONtrast (対照) と conTRAST (対照する), AUgust (8月) と auGUST (荘厳な) のように同じ綴りでもストレスの置き方でこのように意味や品詞が変わる。また, greenhouse (温室) / green house (緑の家) や lighthouse (灯台) / light house (明るい家) など複合名詞と名詞句においても, ストレスの置き方によって意味が異なる。文字ではなく音声で語句を示すのであるから, 音声上ははっきりと区別しなくてはならない。

### 3. リズムの調節

前述の Mary sold a nice and yellow racket. では, 各フットは強弱 (●・) のペアである。しかし, いつもこのようにすべてのフットが「●・」という規則的な繰り返しであるとは限らないのである。例えば, nice を beautiful に置き換えた場合, 以下のとおりになる。

Mary	sold a	<b>beautiful</b> and	yellow	racket
● .	● .	● . . .	● .	● .
1	1	<b>1</b>	1	1

3番目のフット (beautiful and の部分) の構成は「● . . .」である。英語は, できるだけ時間的に同じ長さで1つ1つのフットを発音しようとする言語である。従って, このフットにある3つの弱音節 (. . .) を他のフットに比べて早く発音し, リズムを調節するのである。イメージ的には [BEAUtifuland] である。リズムが調節されることを覚えておけば, 英語を聞いたり, 話したりする際に, 役に立つであろう。

このような時間的な長さの調節は日本語にも見られる。1音を長音化して, 2音にする場合がそれである。これによって, 日本語のリズムが保たれる。例えば, 2と5はそれぞれ [に], [ご] と発音される。しかし, 2.55の場合, 通常は [にー | てん | ごー | ごー] と2と5を伸ばして発音する。1拍休止入れて [に・ | てん | ご・ | ご・] とすることもできるが, これでは音が連続せず, リズムの据わりが悪い。そこ

で、[にー]と[ごー]のように伸ばして2音にし、日本語のリズムを保つのである。フリーダイヤルの「0120」の2の場合も同様である。なお、2.5の場合でも、[にー | てん | ごっ]と最後に声門閉鎖音があるように聞き手に感じさせ、リズムを調節しているのである。2.5をゆっくりと発音する場合でも、[にー | てん | ごー]と最後の5を伸ばして発音することもある。

### Ⅲ. 英語のリズムの指導実践

これまで概観してきた理論を踏まえて、実際に大学の英語授業にあてはめて指導した内容およびその指導結果を考察する。

#### 1. 指導の実際

2008年度（後期）にある私立大学で、英語を専門としていない大学生（1年生30名）に対して実施したリズム指導の内容は次のとおりである。

##### （1）指導概要

- (a) できるだけ母語と対照しながら理屈を説明し、気づかせる指導を基本姿勢とした。これは、母語と比較した方が学習者は理解しやすいからである（例えば、神保1921:194、島岡1968:12、友部1999:20-21、川越2000:10、田邊・三浦2000:617など）。
- (b) 全体の指導の流れは、トップダウン方式<sup>(註8)</sup>とした。トップダウン方式とは、はじめに英語学習者に英語のリズムとは何かを示して、英語のリズムを大掴みさせる。それから英語のリズムを作り出すための個別の項目を指導する。今回は、第1回と第2回で英語のストレスとリズムに関する大枠を示した。その後、英語のリズムを会得するための基本的な項目を指導した。
- (c) 指導分量は1回につき1テーマとした。1つの学習項目に集中させるためである。
- (d) 実施項目であるが、全体として11回で一応完結できるように企画した。そして、指導全体のテーマを「リズムで覚えると忘れない！」とした。これは、大きな学習テーマを学生に明確に示すためである。さらに、以下のとおり、各回のテーマを「本日のお題」として掲げた。

##### 【各回のテーマ】

第1回「リズムの素は？」

（日英両語でどのように意味を区別するのか）

第2回「英語は強弱リズム」

(英語は強弱のペアが交互に現れてリズムを作る)

第3回「強弱リズムの正体(1)」

(単語レベルでも句レベルでも強弱リズムはある)

第4回「強弱リズムの正体(2)」

(内容語と機能語によって強く発音する単語が決まる)

第5回「リズムで意味が変わる!？」

(複合名詞と名詞句ではリズムも意味も違う)

第6回「本格的にリズムに乗ろう!(1)」

(リズムの定着を図る)

第7回「本格的にリズムに乗ろう!(2)」

(心の「強」、心の「弱」を知る)

第8回「足し算」

(音が結合して別の音に聞こえる)

第9回「引き算」

(音が脱落して聞こえない。その代わりに僅かなポーズが存在する)

第10回「会話文にもリズムはある」

(詩や単文だけではなく、会話文にもリズムがある)

第11回「総まとめ」

## (2) 指導回数と時間

授業の進み具合を考慮し、今回は11回で完結とした。そして、90分授業の初めの15分程度を使用した。おおよその時間配分は、導入が2分、展開が11分、まとめが2分である。授業内容に余裕があるときには、15分を20分に増やすこともした。

## (3) 分かりやすいテキストの使用

- (a) ほぼ毎回同じ単文を利用した。これは英語のリズムをできるだけ早く掴んで欲しいからである。また、応用を利かせるために、同じ単文でも単語を変えたり語を増やしたりするなどして練習させた。
- (b) マザーグースの詩も3編使用した。各詩が短い上に、リズムがほぼ規則的だからである。また、マザーグースは題材としても英語文化の縮図だからである。

## (4) 指導方法

理屈を説明した後で、コーラス／ペアで練習させた。コーラスで練習させるときには、メトロノームを用いた。また、手拍子も適宜活用して練習させた。ここでは紙数

の都合上、第2回「英語は強弱リズム」に関する指導内容を示すことにする。(他の指導テーマと例文については「資料」を参照)

なお、本人が達成度合いを感じる事が重要なので、評価方法は、自己評価とした。毎回実施する授業アンケート共に今回の理解度を自己評価させ、次回、コメント付きで学生に返却した。

【例】第2回「英語は強弱リズム」(英語は強弱のペアが交互に現れてリズムを作る)

過程	学習目標・活動	内容	留意点
導入 2分	あいさつする		
	前時の復習をする	日本語は音の高低で意味を区別し、英語は音の強弱で意味や品詞を区別する。	
	本時の学習ポイントを提示する	英語の強弱リズムに慣れる。	
展開 11分	黒板に例文を書く	(1) Mary bought a nice and yellow racket. (2) Mary bought a beautiful and yellow racket.	各フットに●と・書く。内容語と機能語ということには触れない。この時点では、あくまでも英語のリズムは強弱と言うことに指導の焦点を置く。
	コーラスで練習させる	1. (1)の例文について練習させる。 (a) 指導者が手拍子またはメトロノームに合わせて音読してみせる。●が置いてある音節の出だしの子音から強く発音してみせる。 (b) 指導者の手拍子またはメトロノームに合わせてリピート練習をさせる。 (c) 手拍子を徐々に早くしてリピート練習させ、速度が速くなってもリズムに乗れば発音できることに気づかせる。	
		2. (2)の例文について練習させる。 ・ beautiful and のフットが他のフットとのリズムを一定に保つために早口になっていることに気づかせる。 ・ その場合、日本語にも同じ現象があることを説明すると理解しやすい。 【例：数字の「2」】 1. 「2」を黒板に書き、発音させる。 2. 「0120」と黒板に書き、再度発音させる。2を[にい]([にー])と発音することによって、0と1と同じ長さに調節していることに気づかせる。	
まとめ 2分	本時のまとめ		

(5) 結果

紙数の都合上、各回における学生の反応を掲載することはできない。しかし、最終授業において、本リズム学習についてアンケートを実施した(無記名)。以下は、30名の回答である。回答内容を踏まえて、以下のとおり、大きく3つに分類した(「発音が上達したと答えた学生」、「発見や気づきがあったと答えた学生」、「リズム学習が楽しかったと答えた学生」)。

発音が上達したと答えた学生	
1	リズムに乗るということが大切というのを初めて知り、自然と英文が上手くスムーズに読めるようになった。
2	日本語英語から「真の英語」に一步近づいた気がしています。
3	以前よりも、発音が上手くなったように思います。
4	発音がすごく苦手だったが、リズムに乗ってしゃべる方法などを聞いて、はじめのころよりは少しよくなった気がした。
5	リズムにのって発音することによって、いつもは話せなかった英語もなんとなく話せた。
6	発音が少しは改善された。
7	教わったとおりにやったら、少しは英語っぽく話せた。
8	英会話で習うような、会話の発音を学べた。
9	分かりやすく説明して頂いたので、発音が少しでも成長できていると自分で満足している。
10	習ったとおりに言ってみると本当に英語っぽく聞こえました。
11	これでだいぶ、リズムカルに読めるようになった。
12	いつも英文を読む時棒読みになってしまっていたわたしが初めて英文をスラスラ読むことができた。
13	読みにくい文章でもリズムをつけて読むとスラスラと読めるようになった。
発見や気づきがあったと答えた学生	
14	なにげなく習ってきた発音に疑問を持つことができ、解決できたときの達成感がすごくうれしかったです。
15	リズムに乗って表現するのは初めてだったけど、楽しく新たな発見もできたから。
16	なるほどって思うことが多くあった。
17	英語の発音がどんなものかを知ることができたし、様々な発音がありました。
18	「足し算」や「引き算」など、不思議に思っていることが次々と解決していきました。
19	強弱やアクセントリズムなど、コツがつかめば、上達するのだなと思いました。
20	リズム、つかめました。
21	発音のコツが分かり、英文を音読しやすくなりました。
22	会話をするのにコツをつかめました。
23	先生のあとに続けばリズムが取れるのですが、家とかで英文をリズムに乗せてみたところ、なかなか英語っぽくならなくて、「難しいな」と感じるがありました。
リズム学習が楽しかったと答えた学生	
24	●・でわけられていて、強調する部分と弱く発音する部分とがすぐに見てわかったので、とても役に立ちました。マザーグースもたのしかったです。
25	教わったことを意識して発音すると本物の英語のように読めて楽しかった。
26	おもしろいし、分かりやすい。
27	リズムでやる楽しさもあり、また発音が上手になれる。
28	楽しかったです。
29	これで私もネイティブアメリカンの気分になされた。
30	発音がもっともっと上手になりたいという気持ちがより強くなりました。

## 2. 考察

上記の学生の声を変えて読むと、全体的には今回のリズム指導を有意義に感じている学生が多いと思う。しかし、個別にみれば、上達したと自己評価を下した学生もいれば、そこまで自己評価できないものの、英語の音声日本語と違っていることや英語の音声について気づきがあった学生もいる。中には、授業でできても、自宅で復習すると、難しさを感じてしまうという学生もいる。

今回の指導では、毎回、前時の授業で説明したことを一人ずつ発音させて習熟度合いを確かめたわけではない。そのため、データとしては、学生の自己評価が即、今回のリズム指導の成功とは必ずしも言い切れない。しかし、まずは、英語の音声や発音を知って何かに気づくことや何かを発見することが外国語としての英語学習では必要であると考え。この考えからすると、気づきや発見をして、練習した学生の学習意欲は評価してよいのではなかろうかと思う。そして、その意欲がいままでよりも上手に話せるようになったという自己評価につながっているのだと考える。

## おわりに

本稿では、まず、英語のリズムの重要性について述べた。次に、日本語のリズムの特徴に言及しながら、英語のリズムの特徴を概観した。例えば、英語のリズムは音の強弱である。そして、それによって意味や品詞が区別されることに触れた。また、内容語と機能語を目安にして文の強弱リズムが生まれることを述べた。この強弱リズムの最初の強ストレスから次の強ストレスの前までをフット (foot) と呼び、このフットがほぼ 1:1 (等時間隔) の割合で発音される。1:1 のリズムに調節するため、フットの中にある弱音の数によっては、そのフットを早口で発音しなければならない。最後に、限られた範囲ではあったが、先行研究およびわずかながらの指導実践を踏まえて、英語のリズムの指導案を提示した。

しかし、指導方法、指導内容、個人別の習熟度合いの評価方法など、グループレッスンにおける音声指導に関して、まだまだ改良していかなくてはならない。今後、改良に向けて、さらに論考や先行研究を調査し、実践を重ね、指導案の一つの方向性を見出したい。今回はその第一歩にすぎない。

以上

## 注釈

(1) 本稿では「アクセント」という言葉ではなく、「ストレス」という言葉を用いる

ことにする。「アクセント」というと「発音の変種」(小林 1964:46)を指すこともあるからだ。

- (2) 例えば、前田忠夫『新説英語教育法』、篠崎書林、1968:103。
- (3) 「音節」というと、厳密には特殊拍を含んで分けるので、同じ単語でも拍数と音節数と異なる場合がある。例えば、「よこはま」(横浜)は4拍4音節だが、「にっぽんご」(日本語)の場合、「にっ・ぽん・ご」と認識し、5拍3音節となる。「とうきょう」(東京)も4拍だが、通常は「とー・きょー」と発音するので、2音節となる。しかし、英語の場合に「音節」、日本語の場合に「拍」と使い分けることはせず、「音節」に統一することとする。従って、「よこはま」は4音節語、「にっぽんご」は5音節語、「とうきょう」は4音節語と表現する。
- (4) 英語のリズムでもこのポーズ(休止)は大切である。例えば、What a nice and happy time we have! では、| What a | nice and | happy | time we | have | と、最後の have の foot だけ「強」で終わっている。しかし、このあとに「空白の弱」、つまり、ポーズがあると考え、すべての foot が「弱」で終わる状況を作り出す。
- (5) 一般的に、近畿地方では東京方言と逆の高低リズムパターンである。茨城や福島あたりでは、平板(フラット)なりズムパターンである。
- (6) 内容語とは、名詞、動詞、形容詞、副詞、疑問詞、指示代名詞、数詞など、句や文の中で伝達したい意味内容を持っている語を指す。
- (7) 機能語とは文字どおり、be 動詞、助動詞、前置詞、冠詞、代名詞、再帰代名詞など、内容語以外の品詞が機能語に該当する。
- (8) この逆のボトムアップ方式もある。個別の項目を指導して、最後に英語のリズムを完成させる方法だ。細かい点を積み上げて最後に全体を示す方式である。どちらの方法でも英語のリズムの指導はできると考えるが、今回はトップダウン方式の指導とした。英語のリズムを示して気づかせれば、会得するために必要な項目を知ることができ、それらを練習する理由も理解できる上、ポイントを押さえた学習が可能だからである。

## 参考文献

- 五十嵐康男 (2003) 「音声英語の文法—強勢、高さ、息つぎの関係—」『成城イングリッシュモノグラフ第36号』成城大学大学院文学研究科
- 今村茂男 (1958) 「英語教師と研修」『英語教育 8月号』大修館書店
- 宇都出元一 (1983) 「強勢、強形・弱形」『英語教育 9月増刊号』大修館書店
- 大喜多喜夫 (1998) 「中等教育における英語の音声指導のあり方に関する考察及び日本

語と英語の音声体系の相違に基づく改善のための具体的提案』『関学教職教育第3号』関西学院大学教職課程室

大八木廣人 (1980) 「リズムと歌」『英語教育ジャーナル6月号』三省堂

小川芳男 (1978) 「英語の基礎を教えるということ」『英語教育5月号』大修館書店

川越いつえ (2000) 「日本人はなぜ英語が聞けないのか?」『英語教育10月号』大修館書店

———— (2001) 『英語の音声を科学する』大修館書店

窪藪晴夫, 溝越彰 (1992) 「英語の発音と英詩の韻律」『英語学入門講座第7巻』英潮社

小林英智 (1964) 「強勢 (Stress)」『現代英語教育9月号』研究社

小松達也 (1986) 「地道な工夫と努力によって」『現代英語教育1月号』研究社

坂野信彦 (2004) 『七五調の謎をとく—日本語リズム原論』大修館書店

島岡丘 (1968) 「日英語の音体系の比較—音声指導への適用について—」『現代英語教育6月号』研究社

———— (1973) 「発音における誤りの傾向—FL Planningの現場から—」『英語教育8月号』大修館書店

神保格 (1921) 『邦人本位 英語の発音』大倉書店

———— (1927) 『最新英語音聲學』大倉書店

竹内理 (2004) 『認知的アプローチによる外国語教育』松拍社

田中春美 (1968) 「発音指導における異音の扱い」『現代英語教育3月号』研究社

田邊祐司, 三浦弘 (2000) 「発音指導の新たな枠組み—コミュニカティヴ・アプローチの観点から—」『英語音声学第3号』英語音声学会

友部隆教 (1999) 「英語子音指導に関する一考察」『語学研究第90号』拓殖大学言語文化研究所

藤井健三 (1979) 「英語発音矯正講座 (22)」『現代英語教育8月号』研究社

前田忠夫 (1968) 『新説英語教育法』篠崎書林

三浦弘 (1995) 「日本人学習者のための英語音声指導」『言語文化研究会研究紀要第5号』言語文化研究会

森住衛 (1978) 「アクセントのある重点的指導」『英語教育6月号』大修館書店

Catford, J. C. (2004) *A Practical Introduction to Phonetics, second edition*, Oxford University Press.

Dixon, J. M. (1886<1980>) “English Lessons for Japanese Students” 『英語教育史資料第2巻』(大村喜吉, 高梨健吉, 出来成訓)

Halliday, M. A. K. (2004) *AN INTRODUCTION TO FUNCTIONAL GRAMMAR, 3rd. edition*, Arnold

Matsusaka, Hiroshi (1980) “The Secondary Stress in English”. 『學術研究 第29号』  
早稲田大学教育学部

Pike, K. L. (1965) *INTONATION OF AMERICAN ENGLISH*, The University of  
Michigan Press

Roach, Peter (2004) *English Phonetics and Phonology, 3rd. edition*. Cambridge  
University Press.

Sweet, Henry (1888<1984>) *History of English Sounds* (復刻版), Oxford University  
Press (明倫出版)

### 資料 【各回のテーマと指導に使用した例文／マザーグースの詩】

第1回「リズムの素は？」(日英両語でどのように意味を区別するのか)

- ・ 雨 vs. 飴
- ・ August vs. august

第2回「英語は強弱リズム」(英語は強弱のペアが交互に現れてリズムを作る)

- ・ Mary bought a nice and yellow racket.
- ・ Mary bought a beautiful and yellow racket.

第3回「強弱リズムの正体(1)」(単語レベルでも、句レベルでも強弱リズムはある)

- ・ understand
- ・ Mary bought a nice and yellow racket.
- ・ seven cups of coffee

第4回「強弱リズムの正体(2)」

(内容語と機能語によって、強く発音する単語が決まる)

- ・ Mary bought a nice and yellow racket.
- ・ Mary bought a wonderful and yellow racket.
- ・ Mary saw him running faster.

- ・ マザーグース1-1. “I’m a little teapot”

第5回「リズムで意味が変わる!？」

(複合名詞と名詞句ではリズムが違うし、意味も違う)

- ・ a greenhouse / a green house
- ・ a grandfather / a grand father
- ・ a gentleman / a gentle man
- ・ a boyfriend / a boy friend

- ・マザーグース1-2. “I’m a little teapot”

第6回「本格的にリズムに乗ろう！（1）」（リズムの定着を図る）

- ・ Mary bought a nice and yellow racket.
- ・ Mary bought a wonderful and yellow racket.
- ・ Mary bought a nice and wonderful and beautiful racket.

- ・マザーグース2-1. “Pat-a-cake”

第7回「本格的にリズムに乗ろう！（2）」（心の「強」、心の「弱」を知る）

- ・ Mary bought a nice and yellow racket.
- ・ Mary bought a nice racket.
- ・ September / He likes it.

- ・マザーグース2-2. “Pat-a-cake”

第8回「足し算」（音が結合して別の音に聞こえる）

- |     |       |   |
|-----|-------|---|
| [p] |       | Can I help <b>y</b> ou?   |
| [t] |       | Nice to meet <b>y</b> ou.                                       |
| [k] | + [j] | Thank <b>y</b> ou.  |
| [s] |       | I miss <b>y</b> ou.   |
| [b] |       | Grab <b>y</b> our key.  |
| [d] |       | Did <b>y</b> ou know him? / Would <b>y</b> ou like some coffee? |
| [g] | + [j] | Sing <b>y</b> our favorite song.                                |
| [z] |       | Does <b>y</b> our parents live here?                            |

第9回「引き算」

（音が脱落して聞こえない。その代わりにわずかなポーズが存在する）

- |        |        |                      |
|--------|--------|----------------------|
| ___[p] | [p]___ | deep <b>p</b> ond    |
| ___[t] | [t]___ | next <b>t</b> ime    |
| ___[d] | [d]___ | good <b>d</b> ay     |
| ___[k] | [k]___ | black <b>k</b> offee |
| ___[g] | [g]___ | big <b>g</b> ate     |
| ___[s] | [s]___ | ice <b>s</b> kate    |

\_\_\_[m] [m]\_\_\_ some money  
 \_\_\_[n] [n]\_\_\_ ten names

第10回 「会話文にもリズムはある」

(詩や単文だけではなく、会話文にもリズムがある)

- ・既習の会話文の一部を引用してリズム練習

Yoko:

Hi, Phyllis.

Hi,	Phyllis.
● ○	● .

Phyllis:

Hi,	Yoko.	How have you	been?
● ○	● .	● . .	● ○

Yoko:

Oh,	fine.	How about	you?
● ○	● ○	● .	● ○

Phyllis:

Great !	Just	great!
● ○	● ○	● ○

Yoko:

So	how was your	trip to	San Fran-	cisco ?
● ○	● . .	● .	● .	● .

(注:小さい白丸は「心の弱」を示す。すなわち、声には出さないが、そこに「弱」ストレスがあることを意識する。そうすることによって、強弱のフットが確立される。また、同じサイズの長方形で囲むことにより、各フットが等しい長さであることを示す。)

第11回 「総まとめ」

